

## 資料としての納経帳（御朱印帳）が持つ可能性 —秩父札所2番真福寺を例として—

矢嶋正幸（埼玉県立川の博物館）

### はじめに —先行研究と問題の所在—

納経帳とは、納経した証として寺社から発行された書付<sup>(註1)</sup>を収集した帳面のことである。書付には、朱印が押されることが多いことから、御朱印帳と呼ぶこともある。近年は、納経帳よりも御朱印帳と呼んだ方が、一般には通じやすいかもしれない。

納経の風習は平安時代以前に遡るが、納経帳が出現するのは江戸時代中頃とされ、信濃国出身の六十六部、新井得参が元禄14(1701)年から翌年にかけて全国を回ったものが初出とされる(小嶋, 2022)。当初は、一宮や国分寺など六十六部の対象となる寺社からのみ書付を受け取っていたが、次第に日本百観音など、他の寺社からも受けるようになっていった。

近年は、御朱印ブームとなって久しい。2000年代以降、インターネットが本格的に普及するとブログやSNSに自らが収集した御朱印をアップする人が現れる<sup>(註2)</sup>とともに、平成20(2008)年頃からは御朱印巡りのガイドブック(淡交社編集局, 2008)が多数出版されるようになった。さらに、御朱印マニアと呼ばれるコレクターに向けて、寺社では、期間限定のオリジナルの御朱印や、切り紙風の豪華な御朱印が出されるようになっている。そうしたマニアが好む御朱印のデザインやPRの仕方をアドバイスするコンサルタントや、レアな御朱印を転売する業者も現れるなど、いささかブームは過熱気味な様相を呈している。

さて、納経帳を資料にして書かれた論文は少なくない。その最初期の試みとしては、千葉県成田市で発見された天保15(1844)年から嘉永元(1848)年にかけての納経帳をもとに、その旅程を明らかにしようとしたものがある(高野, 1961)。

埼玉県内での同じような試みとしては、入間市内から出発した福島治郎右衛門の納経帳を利用したものがある(工藤, 2017)。このような文献資料をもとにして旅程を再現しよ

うとする研究は、より情報量の多い道中日記を使ったものが先行していた。しかし、文字を使って記録するためには、ある程度の教育が必要であって、教育から疎外された貧困層や女性の記録が残りづらいという難点がある。そのため、山本光正は、庶民女性の旅の実態を明らかにするための資料として、納経帳の利用を提唱した(山本, 2003)。また、埼玉県内でも、女性が全国を旅して集めた納経帳を含んだ資料群「會田津満全国巡礼関係資料」が令和6(2024)年に入間市指定文化財となっている。文化財の指定理由として「江戸時代の当地域における女性の身分的・社会的状況を考究するうえできわめて重要である」と述べられているように(入間市, 2024)、納経帳は、女性史研究の観点からも有効な資料となっている。

また、小嶋博巳は、これまで紹介されてきた納経帳や、自身が紹介したものを取りまとめ、六十六部の巡礼路の実態と変遷を明らかにし、四国辺路形成には、六十六部の関与が強かったことを指摘した(小嶋, 2022)。

上記の研究では、巡礼者の足取りを追うことで旅程や巡礼路を復元するといった地理的な関心から納経帳を扱うことが多かった。それに対し、一つの地域の変遷を追うための資料として、納経帳を扱う研究者もいる。

四国辺路を研究する武田和昭(武田, 2012)は、江戸時代から明治時代にかけての納経帳を資料として、四国辺路の各札所の歴史の変遷を追った。そして、神仏分離・廃仏毀釈といった社会変化による影響は、札所によって濃淡があることや、嘉永7(1854)年の地震に端を発する土佐入国禁止に対して巡礼者がいかように対応したのかを、明らかにした。納経帳を元にして、札所の変遷を追う試みは、有効であるものの、その関心は、四国辺路全体に向けられており、個々の札所を掘り下げていない。

秩父札所の事例を挙げると、岩本馨は1番四萬部寺に関わる社会関係を、信者・巡礼

者との関係、本寺との関係、他の札所別当寺との関係、地域社会との関係の4つのレベルに分けているが（岩本，2007）、札所を全体として眺めてしまうと、こうした諸集団から成り立つ札所ごとに特有の変化を見落としてしまうかもしれないという懸念も生じる。

地域全体を眺めることも大切であるが、1ヶ寺に対象を絞って見つめることで、札所の細かな歴史を描くことも必要ではないだろうか。

また、富山県立山博物館の加藤基樹は、元禄15（1702）年から寛政3（1791）年にかけて立山で発行された12点の書付を紹介し、芦峯寺と岩峯寺での納経請取の権利を巡る争論を分析している（加藤，2019）。18世紀に入ると、納経の書付が、争論を生み出すまでに宗教的、経済的行為として成長してきたことを示しているが、取り上げられた納経帳は近世に留められている。

納経帳は、寺社が存続している限り、年月日が記されて発行され続ける資料である。寺社を通時的に観察するためには、恰好の資料となるはずである。そこで本稿では、上記のような先行研究を踏まえて、秩父札所2番真福寺の書付を収集し、その出現期から現在までの変遷を俯瞰することで、札所寺院の歴史の変遷を通時的に追うことができるのかを試みたい。

### 真福寺について

秩父札所2番真福寺は、秩父市山田に所在している。秩父札所の初見資料となる「長享番付」にはないことから、秩父三十三ヶ所が現在の三十四ヶ所になる時に、追加されたものと考えられている。

『新編武蔵風土記稿』によれば、その本尊は、行基御作の一尺五寸一分の聖観音像とされる。また、当地に住む鬼婆が、秩父札所開關に関わる十三権者に対し、ここを女人成仏の札所にするよう頼んだという伝説がある。

本尊は、室町時代作であると鑑定されているように（山口，1957）、『風土記稿』に記された縁起類が、どこまで歴史的事実を反映したものかは不明である。しかし、近世期に女人救済をうたい多くの巡礼者を集めていたことは確かである。札堂には、十三権者の像が

祀られていたが、近世期後半には、その絵姿が真福寺から発行されていた。この絵姿は、文政6（1823）年に秩父を訪れた竹村立義も現地で購入しており（埼玉県立歴史資料館，1992）、人気の刷り物だった。本絵姿は、複数枚が現存しており、相当数が発行されていたことが知れる。

当時の真福寺は、本堂・奥院・札堂・羅漢堂・大柵権現社・諏訪社・稲荷社・仁王門といった多くの建造物から構成されていた。特に五百羅漢像を納めた羅漢堂は、浮世絵「観音靈驗記」や絵地図「秩父三拾四番観音順礼道筋図」にも描かれているように、本札所のシンボリックな建物になっていた。

しかし、現在の境内にはこれらの建築物は一切残っておらず、三間四面の簡素な観音堂が一棟あるだけである。それは、万延元（1860）年（秩父札所連合会，1988）とも明治時代（栗原，1981）ともされる火災によって、主要な建造物が焼失したためである。現在の観音堂は、明治37（1904）年に再建されたもので、日露戦争中で浄財確保に苦労したとの話が伝わっている（秩父札所の今昔刊行会，1968）。また、戦後のある時期までは境内に納経所があったものの、それも再度の火事により失われ、以降は本寺である光明寺で納経するようになっている。したがって、近世期の本札所は、秩父でも指折りの大伽藍があったにもかかわらず、その風景を現在の境内地から想像することはできない。

本札所は、幾多の変遷を経ながら存続している。しかし、そうした札所の歴史を伝える古文書の類は火災によって失われたため、その変遷を現地資料で確かめることは難しい。そのため、納経帳は、真福寺自身が発行したことが確かな文字資料として、貴重な傍証となるのである。

### 資料について

本稿では、宝永3（1706）年から令和7（2025）年までの319年間の納経帳44点を集めた。令和7年度春期企画展の準備という期限のある調査であるため、年代的に抜けのある時期（18世紀後半など）があることは、今後の課題としたい。様式の違いによって収集した納経帳を5期に分けた。紙幅の都合上、全

ての資料に解説を付すことができないため、特徴的なものだけを取り上げる。

### I 期（宝永3年～宝永4年）

18世紀初頭は、納経帳が出現した黎明期に当たる。(資料1)では、「一 秩父二番日本尊聖観音 行基菩薩御作 御長一尺五寸 宝永三年丙戌 入禅行者 大棚山真福寺」とあり、札所の説明と訪問日、行者名が記されるのみで、奉納経は書かれておらず、参拝証明書といった体裁になっている。

(資料2)は、(資料1)とほぼ同じ様式であり、巡礼者の名前は書かれていないが、「奉納普門品」と奉納経名が記され、末尾に黒印が押されている。両資料の日付には1年1ヶ月ほどの間があるが、両資料の筆跡は異なっている。書付をする人は複数いた可能性が高い。

### II 期（享保7年～明和元年）

享保年間、庶民による寺社参詣の旅が一般化した時期であるとされる。

(資料3)では、「奉納普門品 秩父第二番 御宝前 享保七年九月廿七日 新福寺 清雲行者」とあって右上と右下には、鼎形の黒印が押されている。ここでは、I期にあったような本尊の説明が「宝前」と簡略化されているのが特徴である。III期以降には、記述がなくなる行者名も残っている。II期は、現在の書付様式が整う過渡期といった雰囲気がある。また、本書付の筆跡は3番常泉寺と酷似しており、2番、3番は、同一人物が書いたものである可能性がある。両札所はともに、光明寺の末寺となっており、本寺における札所寺院支配を窺い知れる資料として貴重である。

(資料4)では、「奉納経 大棚山正観自在尊 申年十二月 真福禅寺 行者丈」と記され、3ヶ所に朱印が押されており、現在の納経帳で見られる様式に近づいている。庶民による旅が定着するにつれて、書付の様式も変化したものと考えられる。

### III 期（文政6年～安政6年）

文化文政期は、庶民による寺社への参詣ブームが、最高潮に達した時期である。この

ブームは、天保の改革などにより、時折、冷水が注されることがあったものの、幕末まで持続している。江戸での秩父札所ブームを支えた江戸総出開帳は文化8(1811)年が最後となるが、秩父への巡礼熱は幕末まで冷めることがなかった。

III期では、本尊と併せて五百羅漢について記載されているのが特色である。II期の(資料4)の時点では、まだ五百羅漢の記述がないことから、五百羅漢堂の建立は明和元(1764)年以降である可能性がある。

(資料5)では、「奉納 聖観世音 五百大羅漢 御宝前 寅二月廿七日 大棚山 執事行者丈」と墨書され、3ヶ所に朱印が押されている。札所の情報は、簡略化されている。奉納経も行者名も書かれていない。

(資料7)から(資料10)は、文政5(1822)年4月から翌年7月まで<sup>(註3)</sup>と、1年3ヶ月ほどの間に発行されたものだが、筆跡が異なっている。これらを見比べると、「大棚山」「真福寺」などの表記の有無にブレがあるものの、書かれている内容はほぼ同じと見なせる。一つの札所には、同内容の書付を複数の書き手が渡す体制が整っていたことが分かる。

(資料11)が、これまでと最も異なるのが、版木押しとなっていることである。木版による書付は、(資料15、16、17、19、21)もある。版面は、それぞれ多少の異同があり、何度も再刻されたことが分かる。また、それだけ使用頻度が高かったことも知れる。文化年間の四国辺路では41ヶ所が木版となっているが(武田, 2012)、天保13(1842)年の秩父札所では9ヶ所となっている。四国辺路では、増加する巡礼者に対応するため版木が使われるようになったとされるが、秩父でも同様の理由が考えられるだろう。

### IV 期（文久3年～大正7年）

幕末から大正時代にかけては秩父札所の衰退期に当たるとされる。

(資料22)では「奉納経 正円通殿 別当真福寺 亥十一月二日」とある。右上に押された「秩父二番」と中央の朱印は、III期の(資料21)と同じものであるが、左下の印は花押に変わっている。また、「五百羅漢」が

無くなっているのは、万延元（1860）年に境内が焼失した事実を反映していると思われる。この形式は、花押が（資料23）以降に朱印と変わった他は、ほぼ同内容で明治時代を通して引き継がれている。

明治から大正時代にかけても木版による書付が見られる（資料26、29）しかし、短期間の使用で終わっているようである。ちなみに（資料30）で朱印が多くあるのは、複数回の巡礼で、重ね印が押されているためである。

### V期（昭和5年～令和7年）

昭和5（1930）年は、秩父札所連合会が結成されてから初めての午歳総開帳の年であり、これ以降は秩父札所の復興が進んだ時期となる。

（資料31）では、「奉拝 本尊聖観世音 大棚山 真福寺 四月二十一日」とある。さらに、右上に「秩父二番」とあり、中央に角印、左下に「真福禅寺」、左上に「秩父二番開帳」の朱印が押されている。IV期までは、奉納経や収庫といった納経を示す言葉が入っていたが、この頃からは「奉拝」に変わり、平成15（2003）年の（資料40）では、その文言も消えている。納経という行為が理念としても薄れていったことが反映されていると思われる。

（資料35）から（資料42）までは、筆跡が類似しているのは、内容のみならず筆跡も同内容になるようにと、札所内で取り決められたためである。

戦後になると、手製の納経帳だけではなく、既製品の納経帳も現れてくる。（資料33）は、秩父札所連合会が発行したもので、書付部分が既に印刷してあり、納経所では朱印を押すだけとなっている。（資料34）のものは、阪本時次と堀口英昭が刊行した、札所の案内と納経帳が一体化した書籍に書かれている。（資料37）は、札所研究所が刊行したもので、帳面下部に札所の簡単な解説が付されている。（資料38）は、満願寺教化部が編纂したものである。こちらも帳面下部に札所の解説が付く。満願寺教化部は、「巡礼の会」を組織して、全国各地の巡礼の旅を先導した平幡良雄の書籍を発行した出版部門である。

戦前の秩父札所連合会では、各地に出向い

て巡礼団の募集をおこなっていたが、これまでの村落単位とは異なる集団での巡礼もなされるようになった。『埼玉史談』では、昭和7（1932）年ごろに、札所を廻る見学会を企画している（埼玉郷土文化会 1932）。また、（資料37）の納経帳は朝日旅行会（現、JTB ガイアレック）が作成したものである。旅行会社が、不特定多数の人を募集して、巡礼ツアーを組むことが平成時代には普及していたのである。

（資料37）が書かれた納経帳は、これまで見てきたような冊子型ではなく掛軸型となっている。画面中央に観音菩薩が描かれ、それを囲むように書付がなされる。こうした納経軸は、昭和40年代ごろから見られるようになったものとされ、満願となった軸は、先祖供養のために床の間に飾ることもあったようである（白木、1994）。また、（資料36）は、色紙に書かれたものを集めて額装したものである。

V期に多種多様な帳面が生まれた背景には、秩父巡礼の目的や主催者が多様化したことが関係している。主催者が、顧客ニーズに合わせた帳面を作成した結果が、何種類もの帳面として現れていると考えられる。そして、帳面自体の多様さに比して、そこに記される書付の内容がほぼ同じなのは、変化の主体は巡礼者とその周辺側にあり、札所自身は受動的立場であることを示しているのだろう。

### まとめ

真福寺における18世紀初頭から現代に至るまでの納経帳の変遷を眺めてきた。並べることによって、時代の変化とともに納経帳にも変化が生じていることが確認できた。例えば、III期で、手書きから木版の書付に変わる背景には、江戸後期の寺社参詣の隆盛による巡礼者の増加に対応するためという事情が考えられる。

また、III期とIV期の間には、五百羅漢堂の焼失という大きな事件があった。焼失時期については、万延元年説と明治初年説があるが、本調査によって万延元年説の方が、蓋然性の高いことが判明した。それとともに、旧来言われてきたような近世と明治の断絶は、

真福寺については少ないということも分かった。明治初年の神仏分離政策に伴い、秩父神社境内にあった15番蔵福寺は廃寺となり、札所は少林寺に受け継がれることになった。こうした札所では、書付の内容にも大きな変化が生じるのであるが、真福寺では確認できない。近代初めに秩父札所が衰退した理由を神仏分離などの宗教政策の変化に求めることができるが、これを札所寺院に画一的に当てはめることはできない。真福寺にとっては、焼失した寺院の復興ということが第一の課題であり、神仏分離政策などは相対的に低い課題だった。

共通した社会変化の波中にあっても、それぞれの札所が抱えた課題は異なっており、その克服の仕方は異なっていたのである。こうした巡礼者との関係や札所1ヶ寺のみに限った変化のみならず、本所や他札所との関係の変遷についても、納経帳から窺うことができた。

例えば、先述したように(資料3)で示した2番真福寺と3番常泉寺の書付は同一人物によって発行された可能性がある。両札所は、ともに光明寺を本寺としている。現在でも、冬期など、人が常駐していない時期の28番橋立堂の書付は、27番大淵寺で発行しているように、当時も一つの寺で複数の札所の書付を発行していたことがあったのかもしれない。

札所を取りまとめる秩父札所連合会が組織されたことによる書付の変化も確認できた。午歳総開帳で、特別の朱印が押されるようになるのも、会が結成された昭和5(1930)年以降となる。キャンペーンに合わせて、特別感を出すための工夫だったと思われる。また、V期では、札所連合会がオリジナルの納経帳を発行するなど、巡礼者の需要に合わせた商品開発をしていることも確認された。

このように、巡礼者・本寺・他札所との関係の変遷について、納経帳からある程度読み取ることができた。その一方で、地域社会との関係については、今回の資料からは読み取ることができなかった。しかし、24番法泉寺のように近世期までは修験が別当を務めていたが、明治時代以降は無住となり、地域住民が管理するようになった札所もある。こうし

た他の札所では、納経帳から地域住民とのかわりを読み取れる可能性もあろう。

本件のように、現存資料が少ない寺社での、資料としての納経帳の有効性は近世だけに限らない。例えば、喜代吉榮徳は、大正時代から昭和時代にかけて朝鮮半島での真言宗寺院から受けた書付を紹介している(喜代吉, 2019)。外邦寺社は敗戦時に取り壊されたところが多く、資料もあまり残っていない。こうした寺社の実態を解明する際にも、納経帳は活用できるはずである。各地で納経帳を使った研究が進むことを期待したい。

## 註 釈

(註1) 一般に納経帳に書かれるものは、「御朱印」と呼ばれている。しかし、後述するように初期の納経帳では、墨書のみで朱印は押されておらず、「御朱印」と呼ぶのは適切ではない。また、(資料1)では、「納経」とは記されておらず、後年、神社などでは参拝の証として発行されることから、「納経請状」と表記するのも実態に合わない。そのため本稿では「書付」と表記していく。

(註2) 御朱印についての情報をまとめた個人サイト「古今御朱印研究所 (<https://goshuin.net>) は、2005年5月に公開された「御朱印の部屋」を発展させたものである。また、mixiのコミュニティ「御朱印・納経印」([https://mixi.jp/view\\_community.pl?id=74185](https://mixi.jp/view_community.pl?id=74185)) は、2004年12月16日に開設されている。これらのことから推測するに、2000年代半ば頃が、ネット上における御朱印ブームの黎明期であるようだ。(両サイトとも2026年1月4日閲覧)

(註3) (資料9) 納経帳の1番、3番には、「七月十日」の日付が入れている。

## 謝 辞

本稿執筆のための資料調査、画像掲載にあたり下記の団体、方々にお世話になりました。記して謝意を表します。小鹿野町教育委員会、上里町郷土資料館、群馬県立文書館、光明寺、埼玉県立熊谷図書館、埼玉県立文書館、十和田市教育委員会、弘前市立弘前図書館、武甲山御嶽神社、横瀬町郷土資料館、石

水恵里子、小川義和、神田より子、肥沼隆弘、関根徳治、新島章夫、福島祐憲、原嶋十四男、林 道義、松場正敏、町田廣文、村上哲基、守屋泰平、横山海智（敬称略）

### 引用文献

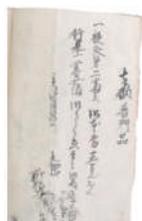
秩父札所の今昔刊行会（1968）秩父札所の今昔。  
秩父札所連合会（1988）秩父三十四所観音巡礼：付・詳細地図（法話と札所案内）。p. 25. 朱鷺書房。  
入間市（2024）會田津満全国巡礼関係資料 [https://www.city.iruma.saitama.jp/soshiki/hakubutsukan/rekishi\\_bunkazai/3/4/9316.html](https://www.city.iruma.saitama.jp/soshiki/hakubutsukan/rekishi_bunkazai/3/4/9316.html)（2026年1月4日閲覧）  
岩本 馨（2007）「札所」吉田伸之（編）民分的周縁と近世社会 6. 吉川弘文館。  
加藤基樹（2019）近世立山信仰における勧進戦略の転向—一六十六部納経と芦峯寺衆徒を中心に—。富山県立山博物館 研究紀要 25 : 35-70。  
喜代吉榮徳（2019）四国辺路研究 32号。海王舎。  
小嶋博巳（2022）六十六部日本廻国の研究。法藏館。

工藤 宏（2017）納経帳から辿る寺社巡礼—福嶋治郎右衛門の軌跡—。入間市博物館 紀要 12 : 57-70。  
栗原仲道（1981）秩父寺の信仰と霊場—秩父札所記— 改訂版。p. 18. 国書刊行会。  
埼玉県郷土文化会（1932）埼玉史談 4巻1号。  
埼玉県立歴史資料館（1992）歴史の道調査報告書 第15集 秩父巡礼道。埼玉県教育委員会。  
白木利幸（1994）巡礼・参拝用語辞典。pp. 98-99. 朱鷺書房。  
高野友治（1961）幕末に於ける詣所の研究：ある廻国行者の納経帳から（1）。天理大学学报 13。  
武田和昭（2021）四国辺路の形成過程。p. 256. 岩田書院。  
淡交社編集局（2008）決定版 御朱印入門。淡交社。  
山口平八（1957）秩父札所の文化財を探る 観音霊場三十四所。  
山本光正（2003）近世・近代の女性の旅について—納経帳と絵馬を中心に—。国立歴史民俗博物館 研究報告 108 : 165-181。

### 書付の資料画像一覧（午年の書付は、赤字で年代を記した）



資料 1.  
宝永 3（1706）年  
「納経覚帳」  
所蔵／武甲山御嶽神社



資料 2.  
宝永 4（1707）年  
「秩父三十四所納帳」  
所蔵／佐野市郷土博物館



資料 3.  
享保 9（1724）年  
「表紙欠」  
所蔵／横山海智



資料 4.  
明和元（1764）年  
「納経帳」  
所蔵／村上哲基



資料 5.  
文化 3（1806）年  
「納経帳」  
所蔵／横山海智



資料 6.  
文化 7 (1810) 年  
「奉納大乘妙典」  
所蔵／横山海智



資料 7.  
文政 5 (1822) 年  
「表題なし」  
所蔵／横山海智



資料 8.  
文政 5 (1822) 年  
「納経帳」  
所蔵／横山海智



資料 9.  
文政 6 (1823) 年  
「納経帳」  
所蔵／小鹿野町教育委員会



資料10.  
文政 6 (1824) 年  
「納経帳」  
所蔵／十和田市郷土館



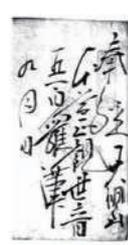
資料11.  
天保13 (1842) 年  
「秩父御札所」  
所蔵／弘前市立弘前図書館



資料12.  
弘化 2 (1845) 年  
「奉納秩父三拾四ヶ所」  
所蔵／吉野元



資料13.  
弘化 3 (1846) 年  
「納経帳」  
所蔵／関根徳治



資料14.  
嘉永元 (1848) 年  
「秩父三十四ヶ(所)納経帳」  
所蔵／埼玉県立熊谷図書館



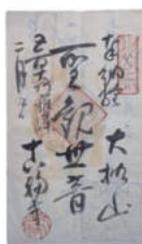
資料15.  
嘉永元 (1848) 年  
「表題なし」  
所蔵／横山海智



資料16.  
嘉永 5 (1852) 年  
「上野神仏秩父札所参詣記」  
所蔵／群馬県立文書館



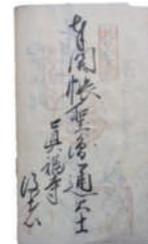
資料17.  
嘉永 7 (1854) 年  
「神社仏閣納経拝禮」  
所蔵／埼玉県立文書館



資料18.  
安政 2 (1855) 年  
「神社仏閣奉納経帳」  
所蔵／横山海智



資料19.  
安政 3 (1856) 年  
「奉納経」  
所蔵／横山海智



資料20.  
安政 5 (1858) 年  
「納経帳」  
所蔵／横山海智



資料21.  
安政 6 (1859) 年  
「秩父坂東奉納経帳」  
所蔵／個人



資料22.  
文久 3 (1864) 年  
「秩父順禮納経帳」  
所蔵／埼玉県立文書館



資料23.  
明治 8 (1875) 年  
「御納経帳」  
所蔵／横山海智



資料24.  
明治14 (1881) 年  
「秩父三十四番奉納経」  
所蔵／上里町郷土資料館



資料25.  
明治19 (1886) 年  
「秩父順拝簿」  
所蔵／個人



資料26.  
明治21（1888）年  
「秩父坂東霊跡納経録」  
所蔵／横山海智



資料27.  
明治26（1893）年  
「秩父三十四番奉納経」  
所蔵／上里町郷土資料館



資料28.  
明治42（1909）年  
「秩父三拾四所納経帳」  
所蔵／横瀬町歴史民俗資料館



資料29.  
大正7（1918）年  
「秩父三拾四ヶ所納経帳」  
所蔵／横瀬町歴史民俗資料館



資料30.  
大正15（1926）年  
「御納経」  
所蔵／関根徳治



資料31.  
昭和5（1930）年  
「奉納経」  
所蔵／個人



資料32.  
昭和41（1966）年  
「秩父札所納経帳」  
所蔵／神田より子



資料33.  
昭和44（1969）年  
「秩父霊場参拝帳」  
所蔵／個人



資料34.  
昭和51（1976）年  
「秩父の札所一紀行・カイド・納経帖」  
所蔵／新島章夫



資料35.  
昭和51（1976）年  
「秩父三十四観音霊場納経帖」  
所蔵／新島章夫



資料36.  
昭和53（1978）年  
「秩父三十四観音霊場納経帖」  
所蔵／原嶋十四男



資料37.  
昭和60年代ごろ  
「納経軸」  
所蔵／新島章夫



資料38.  
平成2（1990）年  
「平成二年午歳総開帳記念」  
所蔵／新島章夫



資料39.  
平成10（1998）年  
「秩父三十四ヶ所観音霊場めぐり」  
所蔵／小川義和



資料40.  
平成15（2003）年  
「秩父三十四観音霊場納経帖」  
所蔵／矢嶋正幸



資料41.  
平成26（2014）年  
「秩父霊場参拝帳」  
所蔵／原嶋十四男



資料42.  
平成28（2016）年  
「秩父霊場三十四ヶ所納経帳」  
所蔵／横山海智



資料43.  
平成31（2019）年  
「秩父三十四観音霊場納経帖」  
所蔵／石水恵里子



資料44.  
令和7（2025）年  
「奉秩父三十四ヶ所霊場納経帳」  
所蔵／矢嶋正幸